2011 年 12 月 24 日　産経新聞
池田前経産副大臣、震災発生 5 日間の記録　菅前首相、あきれた言動

■「怒鳴り声ばかり…指導者の資質を考えざるを得ない」／「不快な思いをさせてしまった」関係者に陳謝

東京電力福島第１原発事故直後、政府の現地対策本部長を務めた池田元久前経済産業副大臣は、3 月 11 日の事故発生から 5 日間を記した覚書を明らかにした。菅直人首相(当時) が原発視察に訪れた際、周囲に怒鳴り散らした様子などが生々しく記録されている。池田氏は産経新聞の取材に「現地対策本部がどう対応し、考えたか。ありのままを記録にとどめた」と語った。

12 日午前 4 時すぎ、菅氏の原発視察の連絡が入った。覚書は当時の池田氏の違和感をこう伝える。

「こうした災害では人々の生存の可能性が高い初動の 72 時間が、決定的に重要だ。指揮官は本部(首相官邸)にとどまって対応にあたるべきだ…」

原発に到着してバスに乗り込んだ菅氏は、隣に座った東電の武藤栄副社長(同) を攻め立てた。覚書には「初めから詰問調であった。『なぜベント(排気) をやらないのか』という趣旨だったと思う。怒鳴り声ばかり聞こえ、話の内容はそばにいてもよく分からなかった」と記されている。

「何のために俺がここに来たと思っているのか！」

菅氏は免震重要棟に入ると夜勤明けの作業員が大勢いる前で怒声を上げた。池田氏は「これはまずい。一般作業員の前で言うとは…」と感じた。

2 階の会議室でも、菅氏は第 1 原発のベント実施を求めて出席者に厳しく問い詰めた。吉田昌郎所長(同) は「決死隊をつくってでもやります」。菅氏の口調は、東電側にだけでなく、福島県の内堀雅雄副知事や班目春樹原子力安全委員長にも厳しかった。

菅氏の振る舞いを見た池田氏は同行した寺田学首相補佐官(同) に「首相を落ち着かせてくれ」と頼み、同席した関係者に「不快な思いをさせてしまった」と陳謝したという。

当時を「戦場の指揮官のような心境だった」と振り返る池田氏は、最高指揮官だった菅氏の言動について「僕もあきれた」と述懐する。覚書には「指導者の資質を考えざるを得なかった。指導者は短い時間であっても沈思黙考することが大事だ。大局観をもって事にあたらなければならない」と記している。

原子力安全・保安院などの対応については「冷戦後いわれたデタント(緊張緩和) ぼけに陥っていた」「何となく原子力安全神話のムードに包まれていた」と指摘している。

池田氏は 5 月 19 日に体調を崩して入院したが、菅氏は国会で追及されるまでこの事実を公表せず、10 日間以上も現地対策本部長が不在となった。7 月には菅氏は池田氏を経産副大臣から更迭し、中山義活政務官を昇格させようとしたが、国対の反対で撤回している。

記事以上

……

現地で関係機関が一堂に会し、事故対応や住民避難などの対策に当たる「オフサイトセンター」は、地震で停電したうえ、非常用電源も故障。このため、隣接する福島県原子力センターに一時的に居所を移す。現地本部長の任に当たる池田経産副大臣らが自衛隊のヘリでオフサイトセンターに着いたのは12日午前零時。ほぼ同じ頃に、文部科学省職員も現地に到着。さらに、3月11日夜から12日にかけて、自衛隊、福島県副知事等、(独)日本原子力研究開発機構、(独)放射線医学総合研究所 等の職員も現地に到着。しかしながら、現地

対策本部構成員として本来予定されている関係府省職員等の初動の参集割合は、全体に低調であった。また、担当の原子力安全委員及び緊急事態応急対策調査委員の現地派遣についても、防災基本計画通りに直ちに派遣されなかった。
3時20分に非常用電源が復旧し、通信システムも衛星回線によるものが利用可能となり、オフサイトセンターの活動を開始した

.....

12 月 19 日作成「福島原子力発電所事故 3 月 11 日~15 日 / 2011 年　メモランダム＝覚え書」(用紙 10 枚)
前経産副大臣 (政府現地対策本部長) 池田元久

2011 年 3 月 12 日 (土)
現地には、保安院の福島第 1 原発と第 2 原発の原子力保安検査官事務所の検査官の他、東電、地元消防職員が集まっていた。
直ちに横田第 1 原発原子力保安検査官事務所長から、原発(プラント) の状況について聴く。
しかし、原子炉内の温度、圧力、水位などのデータは計器の故障などにより、計測不能のものが多かった。
電話の連絡も容易でない状態。ようやく繋がった衛星電話で海江田経済産業大臣に現地到着を報告した。
海江田大臣らが午前 3 時にベント実施について記者会見をするという連絡が入った。
内堀雅雄福島副知事、黒木審議官、ヘリコプターに同乗してきた原子力安全委員会の職員らと協議した。
事故対応ではベントは「定石」であるとしても、ベントを実施した場合、周辺住民に与える影響は大きいので、データをできるだけ正確、迅速に把握するよう東電の吉沢班長、横田所長に指示した。
松永次官に電話し、ベントに関連しプラント(発電所)のデータ把握に努めていること、ベントは一義的には事業者の判断で行うべきことを伝えた。

午前 2 時半前、東電班長より 1 号機の原子炉のデータ(格納容器の圧力上昇など) の報告を受け、ベント実施を了承した。

午前 4 時過ぎ、菅総理大臣が福島第 1 原発を視察するとの連絡が入った。未だかつてない原発事故の現場を観たいという気持ちは分かる。
しかし、今回の大震災は原発だけではない。稀に見る大津波、地震であり、テレビ画面が繰り返し伝えるように、家、建物、船が流され、そこに居た人々の安否が気遣われる状況だ。こうした災害では、人々の生存の可能性が高い初動の 72 時間が、決定的に重要だ。
指揮官は本部に留まって、人命の救出に全力を挙げ、同時に通信手段の整っている本部で原発事故の対応にあたるべきだ。
また、どうしても現地視察に来るのであれば、重責を担っている本部長(総理)に万が一のことがあってはならないので、視察先は第 1 原発ではなくオフサイトセンターにすべきだと考えた。
このような考えを黒木審議官に東京に伝えるように言った。(しかし後で聴くと、現地対策本部長の見解は保安院止まりで、総理には届かなかったようだ。)

午前 7 時 10 分過ぎ、福島第 1 原発のグラウンドで黒木審議官、内堀副知事、武藤栄東電副社長とともに菅総理を出迎えた。一行はそばに待機していたバスに乗り込んだ。前から 2 番目窓際に総理、その隣に武藤副社長、後ろの座席に班目春樹原子力安全委員会委員長に座ってもらい、通路を挟んだ反対側に現地対策本部長が座った。総理は武藤副社長と話し始めたが、初めから詰問調であった。「なぜベントをやらないのか」という趣旨だったと思う。怒鳴り声ばかり聞こえ、話の内容はそばに居てもよく分からなかった。
免震重要棟に玄関から入った。交代勤務明けの作業員が大勢居た。
「何の為に俺がここに来たと思っているのか」と総理の怒声が聞こえた。これはまずい。一般の作業員の前で言うとは。
2 階の会議室で菅総理は武藤副社長、吉田昌郎第 1 原発所長から、事故の状況説明を聞き、特に第 1 原発のベントの実施を強く求めた。吉田所長は総理の厳しい問い詰めに、「決死隊をつくってでもやります」と答えた。
やりとりの合間に、黒木審議官は、第 2 原発にも原子力緊急事態宣言を発令することと、3 キロ圏内の住民

に対して避難の指示をすることについて総理の決裁をとった。
また、総理は、県副知事に対して、住民へのヨウ素剤配布などについて質問した。東電側にだけでなく、副知事や班目委員長に対しても総理の口調は厳しかった。
総理は会議室を出てから、現地対策本部長の背中に手を置き「頑張って」と激励した。しかし、総理の態度、振る舞いを見て、同行した旧知の寺田学補佐官に「総理を落ち着かせてくれ」と言わざるを得なかった。また、政権の一員として、同席した関係者に「不快な思いをさせた」と釈明した。

視察を終わって、総理がこの時期に現地視察をしたことと、現地での総理の態度、振る舞いについて、指導者の資質を考えざるを得なかった。かつて中曽根総理が在任中、座禅を組んだことを思い出した。座禅などを組まなくてもよいが、指導者は、短い時間であっても、沈思黙考することが必要だ。思いをめぐらせ、大局観をもって事にあたらなければならない。そして、オーケストラの指揮者のように振る舞うことが求められる。 (以下略)